

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別郵便法第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十八年一月一日発行(第百九十九巻第一号)

ホトトギス

一月号



俳句随想

二百八十三

汀子

貧しい人々の暮らしの改善と環境保全を目的に一九九二年に設立した地球ボランティア協会は十三年経った。この活動の対象としている国は、今フィリピン・ペルー・ケニア・コンゴといった途上国である。

今、地球上で自然が破壊されている。自然を見続けて来た俳人として黙って見ているわけには行かなくなつた。俳句を作ることによって、自然を見る目が磨かれてくる。そうすると自然を大切にしようと思ふようになる。俳句を広めて行くことで、いわば間接的に自然を守る活動に加わりたいと地球ボランティア協会を設立し、ささやかではあるが、直接に地球を守る活動をしようと考えてきた。

この活動のために、毎年、俳句募集による俳句キャンペーンをしている。「あなたの一句が地球を救う」というもので、今年で十回目を迎えた。是非ご参加頂きたいと希望している。

私はこの地球ボランティア協会の会長を引き受けている。

旬日記 汀子

平成十七年一月八日 芦屋ホトギス会

七草を祝ふは夜となる事情
どうしても四温の油断ありにけり
風花の舞ふ地を発ちて来られしと

一月九日 関西野分会

過ぎてゆく家居三寒四温かな
三寒といふ旅立でありしかな
凍星の一つどこかに箒星
被災地の十年三寒四温かな
なほ執すむすめふさほせ歌かるた

一月九日 下萌句会

日々新たな仕事始となく家居
避寒とも家居心のありにけり
雪深き地を発ちて来し人もみて
青空に置きかへられし雪大地
雪雲の消えなほ零れくるものも

一月十日 ロイヤル俳壇

新年の抱負にあたため来りけり
二日はや一人の暮しはじまりぬ
初富士の近づく空路とる家路
書初めの墨の香の立ち初めにけり

一月十一日 大阪倶楽部

考への及ばぬ日々も初暦
被災地を見舞ふ雪香用意され
残り福とても福には変りなく

卓上に並べられたる松の内
初句会らしく卓上飾られし
引受けし仕事書き足す初暦
弁明に松の内とも言はれず
一月十二日 綿業倶楽部

雪晴の大地に応へたる光
動きなき色を沈めて冬の草
芝の色なほ残りぬし冬の草
一月十三日 清交社

初梅り 天地有情より展け
紅富士の幹もて染めし春著とや
お降に混じり来し白はや消ゆる
震災の十年思ふ寒さかな
机辺より仕事始でありしかな
一月十四日 工業倶楽部

去年今年机上に積まれたるままに
初句会とて改る心あり
一月十五日 福井風水句集序句
乙訓の春秋間はむ初時雨
一月十五日 年尾先生を偲ぶ会

凍雲を虹の消えては生れては
白雲を立たせる風も春隣
一月十六日 偲ぶ会 二日目
二度爆ぜてどつと崩れしどんどかな
たたみ来る波の夜明けやどんど爆ぜ

一月十八日 有恒倶楽部
風花を零す雲より日を零す
心あるとき風家の舞ひはじむ
三寒の旅路家居の四温かな
海を見る恒例といふ初旅に

被災地の舞ふ風花に祈りあり
一月十八日 無名会

義理欠きし心の重荷寒椿
風花の天地有情舞ひはじむ
十年といふ月日あり風花椿
狭庭にも日溜ありて寒椿
旅心いま風花に添ふことも

風花や空の一面傾けて
冬の虹旅路に即かず離れず
一月十九日 夏潮句会
遺族よりつづくえにし
年賀状
焚火してをればたちまち五六人
庭師来てまかせてしまふ焚火かな

改めて女正月とぞ思ふ
庭のもの灰に戻して寒肥に
冬の薔薇あふれし部屋にある名残
焚火する庭の限界あることを
一月二十七日 きさらぎ会

松納ふと挨拶に躓きぬ
富士見えぬ初旅に海荒れしこと
初明りありつつ消えてをりし星
渋滞の十日戎とつながりぬ
一月二十八日 時雨会

目の前の大気絞りて弓始
しなればならぬならぬと春隣
引受けし仕事の時間凍てにけり
協会 賞選考会や春隣
星凍てて夜空の孤独広がりぬ
一月三十日 野分会

過ぎてゆくばかり三寒四温かな
三寒の外出に鎧ひたる疲れ

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年一月五日 一水会

初旅と嘯き君のマンションへ
故郷といふ言の葉に今朝の春

一月六日 蕉心会

初句会皆の笑顔が揃ひけり
恵方より第二句集の届きたる
水嵩に川悴んでをりにけり
着ぶくれてビジネスマンの顔となる
都鳥一羽見付けてよりの数
句友にも芭蕉像にも御慶かな
春著着て蕉心会の幹事たり

一月十三日 土筆会

数の子に奥歯弾んでをりにけり
寒牡丹紅てふ温みありにけり
数の子に箸を伸ばす子ためらふ子
雪吊の手持無沙汰の張りであり

一月十五、十六日 年尾徳ふ会

その中に物の怪沈め凍湖かな
変幻も神の摂理や冬の空

一月十六、十七日 年寿会

寒桜ぴくりぴくりと風に耐へ
春隣てふ戸惑ひのありにけり
木道に笹鳴と靴音和せり
その色で君と判りしコートかな
春隣何時も何かが咲く下田
海光に臘梅の香の解けゆく
穏やかに地震十年の探梅行
日脚伸び影ほど長身にはあらず

一月十八日 草木瓜会

何もかも新しく初明りかな
初明り水平線に空母置き
古都といふ静けさ破り鐘冴ゆる
鐘冴ゆる京都に奈良にバチカンに
風冴ゆる高層ビルに弾かれて

一月十九日 登高会

手毬唄君の顔せ濡れてをり
青木の実葉を額縁として数多
モノクロを染めて青木の実の主張
言冴ゆる会ふは別れの始まりと

猫の手を離るることのなき手毬
一月二十日 「種」六百五十号祝句

寒灯下ハープフルト賀を奏で
一月二十五日 若水会

風の絵馬初天神といふ音色
冬桜とは君の過去語るもの
南の風囁きて春隣
言の葉を風に移して冬桜
春隣言葉選んでゐる君に
浪人生 天 神 花 に 頬 緩 め
春隣ドームは日差溜めてをり

一月二十六日 目黒学園句会

崩れねばならぬ水仙今盛り
水仙の風に耐へねばならぬ岬
街騒も女正月てふ都心
真つ直ぐといふ水仙の気品かな

一月二十七日 角川「俳句」出句

寒鴉廢墟のビルを俯瞰して
丸ビルの窓に春待つ日差かな
日脚伸び高層ビルのあの辺り
春隣虚子も歩きしアスファルト
閉ざされし行幸通り冬の草

雑詠

廣太郎 選

土用鰻食べ太陽の島へ旅 神戸 山田弘子
 夕焼の燃えつきさうな小学校 同
 草の香にまみれし旅の白日傘 同
 火の山の裾の秋簾の中に虚子 東村山 村松紅花
 虚子在りし秋簾の中に戦避け 同
 秋簾越し世を見てをりし虚子遠し 同
 しみじみと青き一葉を裏返す 八尾 岩垣子鹿
 広島に生き八月の便り来る 同
 台風の隻眼にまた睨まるる 同
 ごかい掘ることよりはじめ鯊を釣る 福岡 松尾緑富
 鯊釣の潮入川に餌虫掘る 同
 鯊釣の潮の満ち干に竿合せ 同
 大山寺帰燕の空となりにけり 姫路 桑田青虎
 大山を忽ち消して霧襖 同
 峻嶮を駈けたる霧の早さかな 同
 病葉や病める色にもある仕上げ 香川 湯川 雅
 里の空はみ出してゆく罌雲 同
 踊最高潮疲れ最高潮 同

面映ゆきなどは一時阿波踊 神戸 千原叡子
 句仲間で踊仲間でも野分会 同
 句散らしの踊浴衣にもつ矜恃 同
 瑞巖寺とは露しげき巖に立つ 東京 坊城俊樹
 遊船の唄のやうなる案内かな 同
 みちのくの人頭垂れ稲穂垂れ 同
 一面の浮草の根を誰が思ふ 和歌山 宇田秋思
 くぐりたる茅の輪のかをり蹤いて来し 同
 今の世に弓持たされて立つ案山子 同
 雲の峰脳裏を掠む原子雲 仙台 小島左京
 灼熱に鍛へし太刀の涼しかり 同
 隠し湯も夜は混浴河鹿笛 同
 碧空の雫のやうな花野かな 泉大津 脇 牧子
 目移りも心変りもする花野 同
 海風に花野は星と語るらむ 同
 上の子は線香花火に目もくれず 京都 安原 葉
 残暑とはいへ山国の風は別 同
 その人のなき信濃路の秋の蝶 同
 蟬時雨森だんだんと近くなる 大阪 塙 告冬
 白昼の太陽のなき残暑かな 同
 コスモスに風の溜つてゆきにけり 同
 塩釜の煙も絶えて海の秋 檀原 稲岡 長
 夕月や闇に溶けゆく多賀城趾 同
 仲秋や片雲の風恋うて旅 同

雑詠句評(十二月号より)

空は青雲は白なり原爆忌 広島 藤 丹青

声にかくれんぼの事など全員忘れ見入っている。何とも愉快で美しい情景である。(廣太郎)

仁義・暮潮・昭代
小木菟・雅・弘子
ひさ志・一步・比奈夫
基子・純也・廣太郎

かくれんぼみんな出て来て虹仰ぐ 神戸 長山あや

何人もでかくれんぼをしていた。かくれんぼに夢中になつてい
たとき、誰かが美しい虹の出ていることに気付いた。そのことが
仲間たちに次々に知れわたり、かくれていた者も鬼の番だった者
も、いつしか一緒に虹を仰ぎ見ていたという。虹の美しさに魅了
され、かくれんぼどころではなくなつてしまった状況が、よくあ
らわされている句である。(仁義)

子供たちがかくれんぼをしている。丁度鬼から皆が隠れている
時空には奇麗な「虹」が懸かった。探している鬼か、はたまた隠
れている一人が空を見て「あつ虹や」と叫んだのであろう。その

昭和二十年八月六日、広島市に原子爆弾が投下され、市街は壊滅、二十数万の人命が奪われた。この惨事を繰り返すまいと祈念をこめて行事が行われる。投下ののちに高いきこの雲が立ったこともよく知られている。この句の「雲は白なり」もそのことを頭に思い浮かべて、言われたのであろう。「空は青雲は白」は平和なむしる清澄な景なのだが、その景とうらはらな、きこの雲によつて象徴される大量殺戮の凄惨なイメージを逆に強調する効果がある。ピースフルな青い空と白い雲を、全く逆な不安感、虚無感に変えてしまった手腕が見事である。(暮潮)

重い季題であるが、淡々と情景模写をしているところが却つて哀れを誘う。原爆投下当日も良い天気だったと何かで読んだ事があるが、「空は青」「雲は白」と、その当り前さが不気味な様子を物語っている。この雲が、原爆のきのこ雲のようにも見えてしまふのは深読みのしすぎであらうか。(廣太郎)

(以下略)

天地有情

江戸選

松島に遊びしその夜月の雨
 秋蝶と共に漂ふ心地して
 現代のもののははれは日盛に
 天翔る無心の翼夏の雲
 百寿へといのち惜めと夏見舞
 夫々に残暑に耐へし顔揃ふ
 行きちがふ列車待つ間や藤袴
 仲秋の山ふところ雲の翳
 昼寝していつより犬の寝言癖
 かなかなやぐんぐん母が遠くなる
 葛の花よりみちのくの匂ひふと
 欄間より伊達の闇とは露けしや
 台風の名残の雨に着陸す
 拾ひ読む細字秋灯低く下げ
 庭掃除して箱庭の中も掃く
 吾を吠えし犬が引越しゆきて秋
 網戸てふ結界ありて君と僕
 向日葵の疲れ切つたる夕かな

東京 今井千鶴子
 同 豊中 瀧 青佳
 同 龍野 浅井青陽子
 同 榎原 稲岡 長
 同 熊本 岩岡中正
 同 東京 坊城俊樹
 同 京都 安原 葉
 同 熱海 嶋田摩耶子
 同 東京 稲畑廣太郎
 同

霧が霧呼び北壁にせめぎ合ふ
 霧霽れて北壁の景峨々とあり
 富士駅伝雲海下りて来て速し
 富士駅伝霧の山頂折り返す
 瞬かぬ大きな星とゐる端居
 天の川仰ぐところは祈りかな
 堂縁に立てば一望古都の秋
 露の世と思ひ乍らの九十年
 都内とは思へぬ緑百花園
 百花園めぐる間汗を忘れをり
 松風を整ふるべく松手入
 新しき講座受け持ち獺祭忌
 高張に踊り抜きたる今昔
 里山のつづく丹波路秋半ば
 配らるる水の後れし山田植う
 足は老い耳衰へずほととぎす
 背の反るは悍馬なるべし瓜ながら
 白茄子の馬は新仏のために

姫路 桑田青虎
 同 熱海 嶋田一歩
 同 神戸 長山あや
 同 西宮 吉村けん
 同 福岡 松尾緑富
 同 神戸 三村純也
 同 吹田 宮崎 正
 同 徳島 上崎暮潮
 同 神戸 後藤比奈夫
 同

天地有情句評

汀子

単線の行き違う駅で停車している列車からふと見た藤袴の花。秋の七草の一つで、絶滅のおそれもあるという藤袴との出会い。

かなかなやぐんぐん母が遠くなる 熊本 岩岡中正

母上と自分の距離が遠くなるとはどのようなことであろうか。年老いて行く母を思う悲しみさえ感じられる作者の心情である。

欄間より伊達の闇とは露けしや 東京 坊城俊樹

伊達正宗の城址を訪ね欄間から覗く闇をタイムスリップしてその世界に入り込むとふとはかなさを覚える作者であろう。

台風の名残の雨に着陸す 京都 安原 葉

台風の前路に一喜一憂した作者であるが無事に着陸することが出来た。台風が逸れたと言っても名残の雨は激しく降っている。

庭掃除して箱庭の中も掃く 熱海 嶋田摩耶子

箱や陶器の入れ物に土を盛って山水の景色を作る夏の風物である箱庭の中まで掃く庭掃除。庭の一面と見ている作者。

向日葵の疲れ切つたる夕かな 東京 稲畑廣太郎

暑い一日であった。自分も疲れたのであるが日に対して元気な向日葵もぐったり花を垂れている夕べが描けた。(以下略)

奥の細道の途上、芭蕉は松島の名月を詠むべく心に期したと聞く。作者の期待もはかなく夜は月に雨となった。

松島に遊びしその夜月の雨 東京 今井千鶴子

現代のもののおはれは日盛に 豊中 瀧 青佳

夏の厳しい暑さは身に伝える。現実の厳しさを知りもののあわれさえ感じる日盛りに出掛けて行く作者の思いが吐露された。

百寿へといのち惜めと夏見舞 龍野 浅井青陽子

百寿も近い作者は矍鑠としておられるが、なお命を惜しむようにと厳しい暑さを見舞ってくれた友がいることに心置く作者。

行きちがふ列車待つ間や藤袴 檀原 稲岡 長